

平成 25 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」P 調査集計結果

1 調査教科及び調査した児童生徒数

( ) 内は参加校数

	国語	算数・数学	英語
小学校 4 年		14227 人 (268 校)	
小学校 5 年	15810 人 (307 校)	15821 人 (307 校)	
中学校 1 年		13210 人 (136 校)	
中学校 2 年	14827 人 (151 校)	14872 人 (152 校)	14893 人 (152 校)

2 各問の正答率

(単位%)

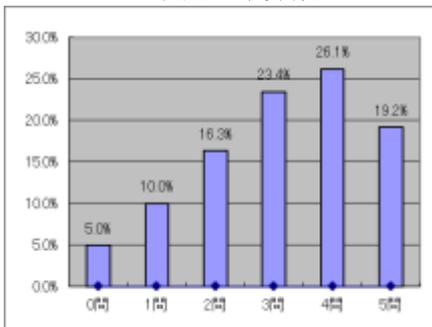
問題番号		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】
小学校 4 年	算数	73.0	73.1	64.4	51.1	51.6
小学校 5 年	国語	78.6	42.7	41.4	72.5	13.0
	算数	79.7	57.7	76.0	60.6	52.1
中学校 1 年	数学	79.6	82.4	57.9	59.5	65.6
中学校 2 年	国語	61.1	22.5	41.0	60.7	61.8
	数学	50.4	74.6	49.9	14.4	54.5
	英語	51.4	64.0	42.3	25.2	56.4

3 正答数の分布

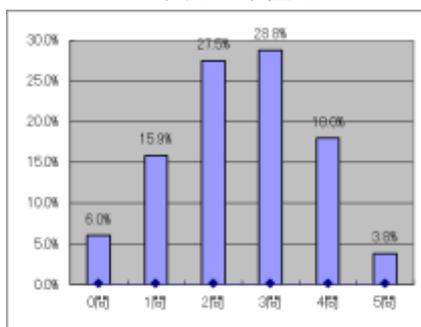
(単位%)

正解数		0 問	1 問正解	2 問正解	3 問正解	4 問正解	全問正解
小学校 4 年	算数	5.0	10.0	16.3	23.4	26.1	19.2
小学校 5 年	国語	6.0	15.9	27.5	28.8	18.0	3.8
	算数	2.8	8.9	16.0	24.2	27.8	20.3
中学校 1 年	数学	4.6	8.0	13.4	18.3	23.6	32.2
中学校 2 年	国語	7.7	17.6	25.1	25.4	17.7	6.4
	数学	6.8	16.0	28.1	28.6	16.9	3.7
	英語	17.0	16.8	18.3	18.3	16.7	12.9

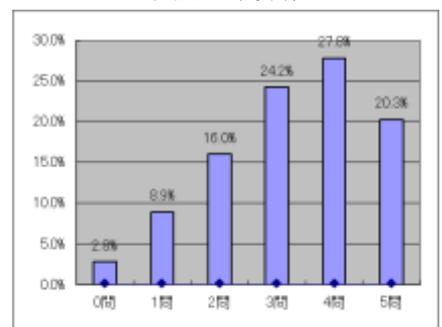
小学校 4 年算数



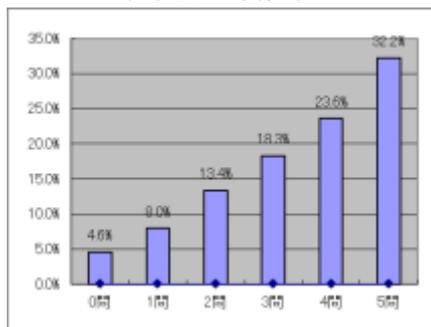
小学校 5 年国語



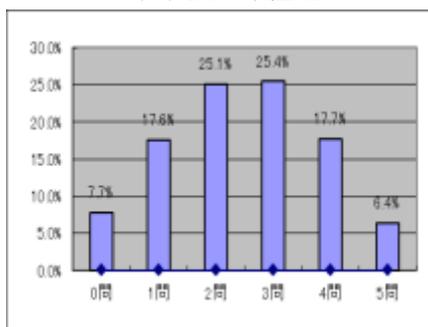
小学校 5 年算数



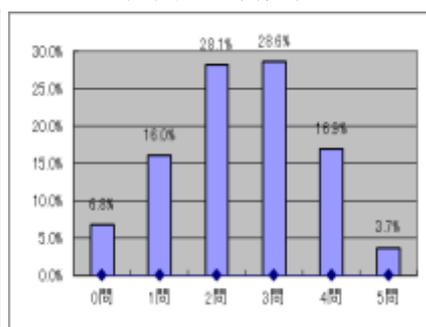
中学校 1 年数学



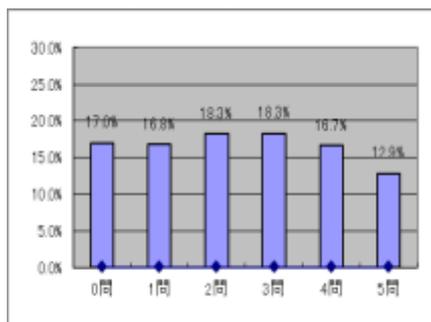
中学校 2 年国語



中学校 2 年数学



中学校 2 年英語



小学校の 4 年算数、5 年算数、及び中学校の 1 年数学は右より、小学校の 5 年国語、中学校の 2 年国語は、ほぼ左右対称の分布となった。各校では、自校の分布と比較することにより、課題を見だし授業改善を進めたい。また、中学校の 2 年英語は、正答数が 0～5 問が、ほぼ同じ割合であり、中学校 1 年を終了した時点において、学習内容の定着の差が大きくなっている。例えば、文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導するなど、日々の授業において、授業改善をさらに進めたい。

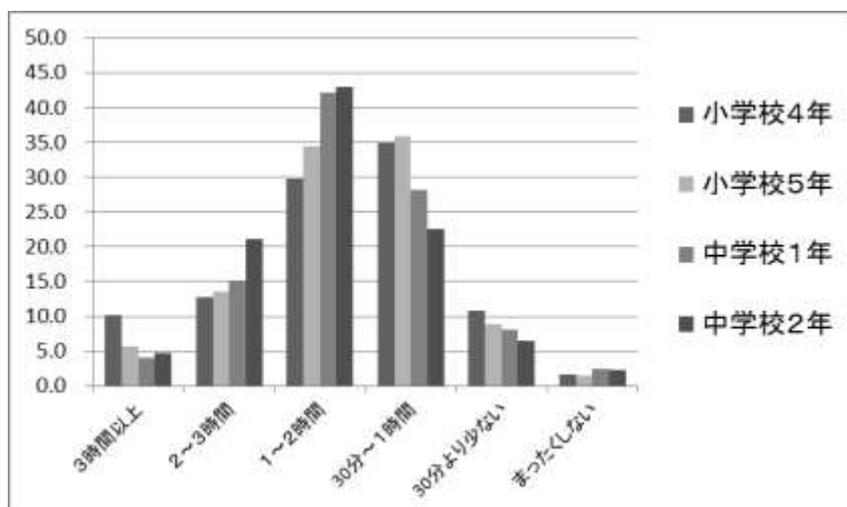
#### 4 家庭学習の時間

◇学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1 日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。）

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 3 時間以上           | 2 2 時間以上、3 時間より少ない |
| 3 1 時間以上、2 時間より少ない | 4 30 分以上、1 時間より少ない |
| 5 30 分より少ない        | 6 まったくしない          |

(単位%)

選択肢	3 時間以上	2～3 時間	1～2 時間	30 分～1 時間	30 分より少ない	まったくしない
小学校 4 年	10.2	12.7	29.7	34.9	10.9	1.6
小学校 5 年	5.7	13.6	34.5	35.8	8.9	1.5
中学校 1 年	4.0	15.1	42.2	28.2	8.1	2.5
中学校 2 年	4.7	21.1	42.9	22.5	6.5	2.3



小学校では、30 分～1 時間の児童の割合が一番高い。また、中学校では、1 時間～2 時間の割合が一番高い。

学力の向上に向けて、家庭と連携しながら、個に応じた指導により家庭学習の習慣化を図るとともに、内容の充実を図りたい。また、わかる授業を積み重ね、授業との関連付けた内容にするなどして、家庭学習への意欲を高める工夫を行っていききたい。

## P 調査結果からみえる課題と授業改善の方向

(解答類型の数値については、傾向をみる際の参考にしています。)

### 【国語】 <小学校 5 年>

- 【一】短歌と解説文を関連づけて読み、根拠となる叙述を問う問題の正答率は 78.6%と高い。文学的な文章を、叙述を基に観点を絞って読む指導をしてきた成果と言える。今後は、**比喩などの表現の特徴に着目して、場面を想像しながら読む指導**を大切にしたい。
- 【二】手紙の後付けに必要な、日付・署名・宛て名のそれぞれの位置を理解して書くことを問う問題の正答率は 42.7%である。類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 B **1**設問三の 19.8% (長野県) と比べて高い。手紙などの形式の決まった文章を実際に書く場面を設定し、指導してきた成果と言える。しかし、解答類型 1 (署名と宛名が入れ替わっている誤答) が全体の約 36%と高いことから、後付けの意味を十分に理解できていない児童がいることが伺われる。今後、実際に手紙等を書く場面では、**単に形式を覚えるだけでなく、そのように書くことで相手にどのような気持ちを伝えられるのかを想像して、後付けを書くこと**のよさについて理解することができる指導場面の工夫をしたい。
- 【三】新聞の記事を書くために必要な事柄を整理し、前後のつながりを意識しながらメモの内容を文章に書き直す問題の正答率は 41.4%である。類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 A **7**の 42.3% (長野県) と比べてほぼ同列である。解答類型 2・3 が共に全体の約 17%であることから、メモの内容と新聞記事を関連づけて読むことはできているが、調べた内容を根拠に文章を書いていくことに課題があると考えられる。また、解答類型 9 も全体の約 17%であり、メモと文章を関連づけることが難しい様子が伺える。**目的や意図に応じてメモを作成し、実際に理由や事例を挙げて書いたり、事実と感想、意見などを区別したりしながら書くような学習場面を仕組み、つながりのある文を書く体験を増やしていくことが必要**である。
- 【四】話し手の話の内容を聞きながら書いた質問について、そのねらいを適切に説明したものを選択する問題の正答率は 72.5%であり、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 A **2**の 64.2% (長野県) と比べて高い。話の中心や話し手の意図を捉えながら聞く力が身に付いてきている児童が多いと言える。今後も、**話の中心に気を付けて聞いたり、話し手の意図を捉えながら聞いたりする学習**を大切にしたい。
- 【五】複数の資料を結びつけて読み取り、事実を基にして自分の考えをもち、文章で表現する問題の正答率は 13.0%であり、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 B **3**四の 39.3% (長野県) より約 26 ポイント低い。解答類型 4 (条件①を満たしていないもの) が全体の約 13%と多いことから、それぞれの資料から読み取れる事実は理解することができるが、それを関連づけて読み取り、自分の考えをもつことができていないことが伺える。新聞や雑誌などの資料に含まれる内容を捉え、それらを関連させて自分の考えを広めたり深めたりすることが重要である。今後、**目的に応じて資料を収集し、複数の資料から読み取れる事実や関連性を明確にして、自分の考えをもつ学習場面を工夫していくことが必要**である。

【国語】 <中学校 2年>

【一】長い間使われてきた四字熟語の正しい表記を問う問題の正答率は 61.1%であり、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 A〔7〕七 1 の 58.4%（長野県）とほぼ同列である。小学校で学んだことわざや慣用句等の知識を生かした学習が行われている様子が伺える。さらに力を伸ばしていくために、言葉の意味を辞書的な意味だけでなく漢字の意味や場面と関連させて、実際の生活場面を想定した指導を大切にしたい。

【二】文中に使われている表現技法を答える問題の正答率は 22.5%であり、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 A〔3〕二より低かった。解答類型 9（正答以外の解答）が全体の約 50%と高いことから、比喩・倒置・体言止等の表現技法そのものについて学習していることは伺えるが、それらが実際の文章中でどのように使われており、文章の内容を読み取る上でどのような効果をもっているのか、十分に理解されていないと考えられる。複数の文章から表現技法を探したり、表現の仕方にどのような書き手の意図や目的があるのかを検討したりする場面を位置付けるようにしたい。

【三】メモに書かれている内容を場に応じた話し言葉に直す問題の正答率は 41.0%で、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 A〔4〕二よりも低かった。解答類型 3 が全体の約 24%と多いことから、場に応じた言葉遣いを意識することはできているが、情報の内容を適切に捉えて一文に書くことができていない様子が伺える。メモを使って実際にスピーチしたり、効果的なメモの作り方を考えたりする場面を設定するなど、相手意識や目的意識を明確にして、話したり聞いたりする学習過程を大切にしたい。

【四】目的に応じて文章の内容を読み取り、必要な情報を選択して書き抜く問題の正答率は 60.7%であり、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 A〔6〕二よりも高かった。目的に応じて必要な情報を読み取る指導の成果と言える。しかし、まだ全体の約 60%であるので、さらに各自が興味をもったことについて必要な情報を取捨選択して、要約したり要旨を捉えたりする指導を大切にしたい。

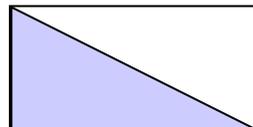
【五】二つの毛筆作品の相違を根拠とし、理由付けをして自分の主張をもつ問題の正答率は 61.8%で、類題である平成 24 年度全国学力・学習状況調査 B〔1〕三より高かった。事実を根拠として理由付けをし、自分の考えをもつ学習に取り組んできた成果と言える。誤答では解答類型 4（両者の違いから、考えの根拠をもつことができていないもの）が全体の約 13%と多いことから、複数の事実を関連させて読み取ったことを理由付けることに課題があることが伺える。また、解答類型 9 も全体の約 12%と多いことから、「根拠—理由—意見」を明確にして自分の考えをまとめ、分かりやすく伝えることにも課題がある。今後は、着眼点を明確にして情報を取り出し、比較しながら自分の考えを明確にする学習と、根拠を明確にして伝える学習を工夫したい。

【算数】 <小学校 4 年>

【1】「整数－小数」の計算の正答率は73.0%であった。昨年度のPおよびC調査の「整数＋小数」の正答率は79.9、87.7%であり、繰り下がりのある減法について困難さや、十進位取りについての理解が十分でないことによる誤答がある。6を6.0と表して、位をそろえて計算するよさに気付く場面を設定しながら、丁寧に定着の状況を見とどける指導を意図的計画的に行いたい。

H25 年度 P 調査  
 $6 - 1.2$   
H24 年度 P 調査  
 $6 + 8.4$   
H24 年度 C 調査  
 $4 + 8.37$

【2】「提示された図形が直角三角形だと答えられるかをみる」問題の正答率は73.1%であった。四角形や正三角形、二等辺三角形と答える解答もみられることから、図形を弁別する根拠となる辺の長さや角の大きさなどに関わる定義や性質を明確にして、説明する活動等を充実させ、理解が確かにしたい。



【3】「数量の関係を捉えているかをみる」「除法の意味について理解しているかをみる」問題の正答率は63.9%であった。答えを導く式が誤っている解等が少なくないことが考えられる。問題文をもとに、数量を図や絵などに表し、数量の関係を調べたり、ど  
 関係を図でとらえる  
  
んな演算で求めるかを説明し合ったりする算数的活動を充  
実させたい。何が何のいくつ分かを確かめながら、数量の関係と演算のかかわりを理解する算数的活動を取り入れた指導を丁寧に行いたい。

【4】「重さについての単位と測定の意味を理解しているかをみる」問題の正答率は51.1%であった。1kgを「1円玉100枚分」「跳び箱5段分」とする解答もあることから、様々な具体物の大きさを調べる活動を積極的に取入れるとともに、既に大きさが分かっている具体物をもとに大きさを予想したり、予想した大きさの適否について考察したりしながら、単位と測定についての理解を深める活動を充実させたい。

【5】「情報を整理したり選択したりして、筋道を立てて考え、示された判断が正しい理由を式と言葉を用いて記述できるかどうかをみる」問題の正答率は51.6%であった。自分の考えを言葉で説明するよう努めた児童が多く、過去の類題の正答率よりも15%程度高い。しかし、例えば「残りのお金が150円なので、ハンカチ以外は買えない事の根拠が記されていない」等、事実や判断の根拠が記載されていないなかったり結論まで書かれていなかったりするなど、説明の要件を踏まえて筋道だった説明ができない解答も少なくない。授業では、「ハンカチを買うと $500 - 350 = 150$ で、使える金額の残りは150円だから。」という説明を受けて、「残りが150円だと、なぜ、もう1種類の品物が買えないのですか。」などについて吟味する場面を位置づけて、判断の正しさを説明するためにほかに示すべき事柄を考えたり、未完成の説明を評価改善したりする活動などを積極的に取入れ、どのような説明をすることが大切なのかを、児童が授業を通して実感的にとらえられるようにしたい。

【算数】 <小学校5年>

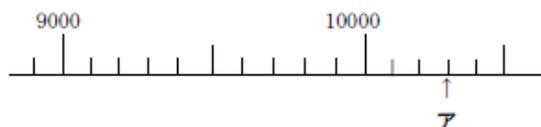
【1】 「(小数) + (小数)」の正答率は79.7%となった。小数の意味や位取りの仕組みを丁寧に指導してきたことや、基準量がいくつあるのかを確かめながら計算の仕方を考えるなどの指導が、児童の確かな理解を促している。位をそろえて計算することができていない児童が10%程度いるので、2.2を2.20と考えて、位をそろえて計算するよさに気付く場面を設定しながら、丁寧に定着の状況を見とどける指導を意図的計画的に行いたい。

H25年度P調査  
4.83+2.2

H24年度P調査  
1.4+3

H24年度C調査  
4+8.37

【2】 「数直線から数を読み取ることができるかどうかをみる」問題の正答率は57.7%であった。

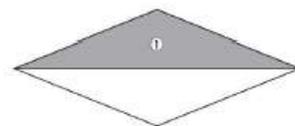


類題である平成21年の全国学力・学習状況調査

での解答(長野県の正答率は60.8%)や、今回の調査の解答状況をみると、1目盛を1000ととらえ、13000という誤答が30%程度みられる。数直線の一目盛りをどうとらえて判断したのかを説明したり、判断の根拠として適切かを検討したりする算数的活動を充実させたい。

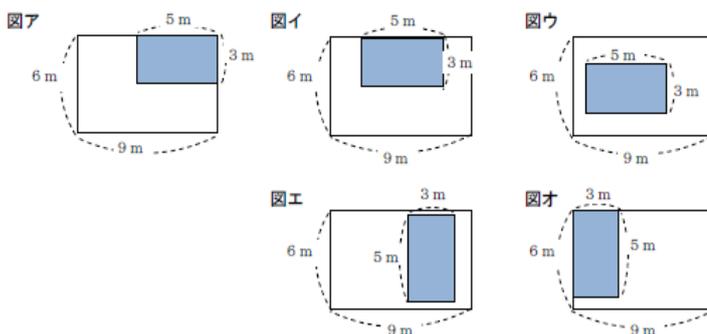
【3】 「提示された図形が二等辺三角形だと答えられるかをみる」

問題の正答率は76.1%であった。提示された図形を正三角形や直角三角形とする誤答もみられることから、図形を弁別する根拠となる辺の長さや角の大きさなどに関わる定義や性質を明確にしなが説明し伝える活動を充実させることで、理解が確実にできるようにしたい。



【4】 「数量の関係を理解しているかどうかをみる」問題の正答率60.6%であった。問題文をもとに、数量を図や絵などに表して数量の関係が適切に表現されているか検討したり、図や絵などをもとに数量の関係を調べたり、どんな演算で求めるかを説明し合ったりする算数的活動を充実させたい。

【5】 「条件を変えた複数の図形で、面積が等しいことの理由を言葉や式や図を用いて説明することができるかどうかをみる」問題の正答率は



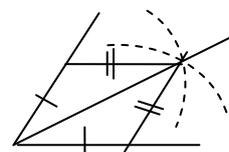
52.1%であった。自分の考えを言葉で説明するよう努めた児童は多いが、類題である平成20年度全国学力・学習状況調査(長野県の正答率72.3%)

や今回の解答状況とみると、判断の根拠が記載されていなかったり結論まで書かれていなかったりするなど、説明の要件を踏まえて筋道だった説明ができない解答も少なくないと考えられる。判断の正しさを説明するために他に示すべき事柄を考えたり、未完成の説明を補ったりする活動などを積極的に取り入れ、どのような説明をすることが大切なのかを、児童が授業を通して実感的にとらえられるようにしたい。

【数学】 <中学校 1年>

【1】「十進位取り記数法の仕組みについて理解しているかどうかをみる」問題の正答率は 79.6%であった。誤答としては、「0.596」や「59.6」と答えている生徒が約 10%見られた。10 倍、100 倍、 $1/10$ 、 $1/100$  などの大きさの数は、小数点の移動によってつくることができることに着目させたい。また、数の大きさの関係を調べる際には、位取りなどの仕組みについて数直線を使ったり、単位を付けて日常生活に結び付けたりして、実感できる活動を位置付け、数の大きさや数の構成についての感覚を豊かにするようにしたい。

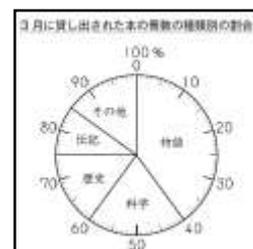
【2】「点対称な図形の一部と対称の中心が与えられたときに、点対称な図形を完成することができるかどうかをみる」問題の正答率は 82.4%であった。線対称な図形をかいている生徒は約 13%見られた。補充指導として、紙でできた図形を折ったり、重ねたり、回したりすることを通して、線対称な図形と点対称な図形の性質を比較する場面を設定したい。



今後、基本の作図では、対称性に着目して、作図の手順を順序よく説明したり、図形をとらえ直したりする活動を位置付けるようにしたい。

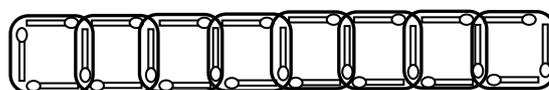
【3】「小数の計算における乗数と積の大きさ、除数と商の大きさの関係について、理解しているかどうかをみる」問題の正答率は 57.9%であった。乗数や除数が 1 より小さくなるときに、乗数と積の大きさや、除数と商の大きさの関係を正しく理解できていない生徒が約 30%見られた。数直線や図などを用いたり、具体的な場面に当てはめたりして数量の関係を捉えられるようにして、乗数と積の大きさ、除数と商の大きさを調べる活動を位置付けるようにしたい。

【4】「百分率の意味について理解しているかをみる」問題における正答率は 59.5%であった。百分率を表した円グラフや帯グラフを使って全体と部分の関係をよみ取るなど、割合を具体的にイメージして数量の関係をとらえる活動を大切にしたい。



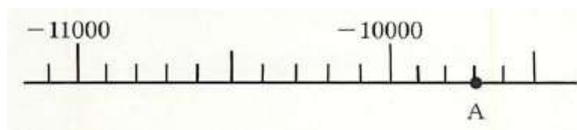
【5】「示された説明を解釈し、それを参考に別の式の意味をよみ取って、数学的に表現できるかどうかをみる」問題の正答率は 65.6%であった。日常の授業を進めるに当たっては、工夫して計算処理したよさについて感じられるような学習場面を設定したい。また、交換法則、結合法則、分配法則を具体的な場面で理解することを意識して指導し、数量の関係を式に表したり、式を読み取ったりする学習を位置づけ、説明し伝え合う数学的活動の充実を図りたい。例えば、わけを説明しあう学習で、1つの考え方だけを扱うだけではなく、

自分と違う友の考えのよさを話し合う、1つの解き方をもとに他の解き方を考え合う等の学習を位置付けたい。



【数学】＜中学校2年＞

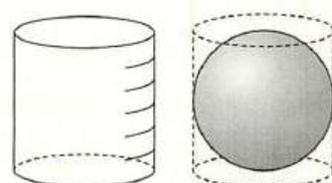
【1】「数直線上に示された負の整数を読みとる」問題の正答率は50.4%であり、1目盛の判断や負の数の数直線上での大小関係の理解に課題が見られる。



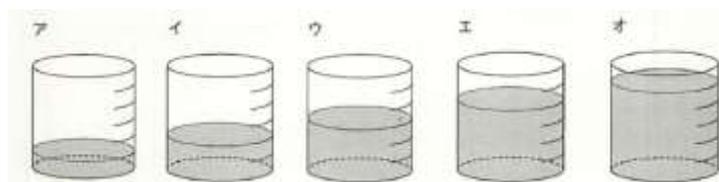
誤答としては、-7000や9700とする割合が約20%見られる。**数直線の一目盛の大きさをとらえたり、負の数は絶対値が大きくなるほど小さくなることを、生徒が自分なりに説明したりする活動を授業で組みたい。**

【2】「比例式を解く」問題の正答率は74.6%であり、比例式を解く手順に従って正確に解を求める力が安定している。誤答としては、比例式を方程式に正しく変換できずに $x=25$ とするものや、比例式の両辺に同じ5を加えて考えているものが、わずかだが見られる。授業では、**生徒が比例式を方程式に直す過程を説明する活動を位置付けるなど、比例式の性質が成り立つ理由を十分理解できるような工夫をさらにしていきたい。**

【3】「球の体積についての理解を問う」問題の正答率は49.9%であり、球がぴったり入る円柱の体積との関係の理解に課題が見られる。誤答として、円錐の体積と混同したと思われるいや、見た目で判断したと思われるウの割合が、合わせて40%弱見られる。半球に入れた水を円柱

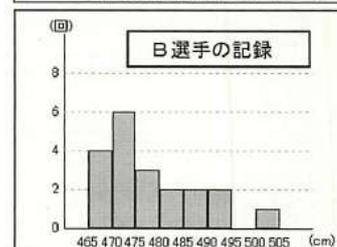
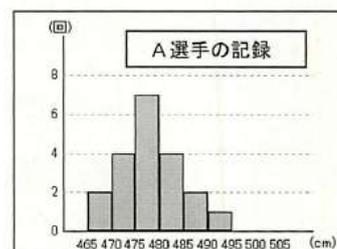


に入れる実験を位置付け、**予想、実験、結果から球と円柱の体積の関係を文字式で表現し、根拠を伝え合う活動などを充実させたい。**



【4】「関数の意味についての理解を問う」問題の正答率は14.4%であり、何が決まるとそれにもなると何が決まるといふ関係をとらえ、「～は～の関数である」と表現する力に課題が見られる。誤答として、弧や中心角など、その大きさを述べていないものや、もともになるものともなってしまうものを逆にとらえるものが、合わせて50%を越えている。例えば、正方形の四隅から同じ大きさの正方形を切り取ったときに、**切り取る1辺の長さを変えると、それにもなるとどんな数量が変わるかなどを実際に調べ、表やグラフ、式に表し、変化や対応の仕方に着目させるなどの活動を通して、「～は～の関数である」という意味の理解を確実にしていきたい。**

【5】「ヒストグラムの特徴をもとに自分の判断理由を数学的な表現を用いて説明する」問題の正答率は54.5%であり、資料を比較したり正しい根拠を挙げたりして説明する力に課題が見られる。誤答として、根拠が誤っていたり、ヒストグラムの読み取りに誤りがあったりするものが約20%見られる。また、説明が不十分な解答や無回答を合わせたものも約20%見られる。資料を基に判断をする学習においては、**自分なりの判断をすること、判断理由を資料の比較とそれぞれの特徴という観点から、数学で学習した用語を正しく使って説明することなどを意識した活動を行いたい。**



【1】 [Q] I (come) to Nagano City last month. → [A] I (came) to Nagano City last month.

【1】 過去形（不規則動詞）の理解をみる問題の正答率は51.4%である。解答類型9が約25%であることから、1年時に学習した不規則動詞の理解が不十分であった生徒が多いことが考えられる。解答類型2のように、動詞を過去形に変化させることに気付いている生徒には、口頭練習等で定着を図りたい。また、理解できていない生徒には、動詞と文中に含まれる時を表す語句から現在形か過去形かを判断する習慣を身に付けさせながら、過去形の定着を図っていききたい。

【2】 [Q] (well / know / don't / very / I / Japanese).  
→ [A] ( I don't know Japanese very well.)

【2】 「主語＋動詞＋目的語」の語順の定着をみる問題の正答率は64.0%である。解答類型9が約28%であることから、英語の語順に対する理解が不十分であった生徒が多いことが考えられる。日本語の語順と英語の語順を比較させながら、英語の語順は「主語＋動詞」が基本であることを理解させたい。理解できている生徒には、「主語＋動詞＋目的語」に「場所」「時」を加えた文や接続詞のある重文、修飾する節のある複文など、より複雑な文を理解させたい。また、英語の語順に不安のある生徒には、主語を示し、動詞、目的語を並び替えたりするなど段階的な指導により、語順を意識できるような指導を行っていききたい。

【3】 [Q] Is Lisa from Nagano City in Japan? → [A] No, (she / she's) ( isn't / not).

【3】 簡単な質問を理解し、Yes, No で適切に答えられるかをみる問題の正答率は42.3%である。解答類型4のYes, she is. が約13%、解答類型9が約18%であることから、疑問文の意味や英文の意味を正しくとらえられず、Yes と解答している生徒が多いことが考えられる。引き続き教科書本文の内容について《Yes-No 疑問文》の指導を行う中で、疑問文の意味や英文の内容を正確に理解させる指導を継続するとともに、主語を正確に見つけ、代名詞で答える指導の継続を図っていききたい。また、一文単位の読み取りから、段落、文章全体の概要の読み取りとなるよう、読み取りの観点を与えた読むことの指導も行っていきたい。

【4】 [Q] What does Mary teach at high school? → [A] She (teaches) ( English).

【4】 本文の内容について疑問詞を使った質問を理解し、適切に答えることができるかどうかをみる問題の正答率は25.2%である。約5割の生徒は問われた内容を理解できているが、解答類型3から約17%の生徒が、主語のSheのあとに動詞のteachを導き出すことができなかつたと考えられる。授業においては、同じ内容でも異なった英語表現で表していく指導を取り入れていききたい。また、3人称・単数で現在形の場合、動詞に-(e)sが付くことの意味も不十分であったと考えられる。主語と時制を確認して、動詞を適切な形にする習慣がつくように口頭練習を行っていくとともに、対話などで質問された内容をフルセンテンスで正しく答えたり、書いたりしてまとめるなどの活動を位置付けることにより、確実な理解・定着を図っていききたい。

【5】 [Q] 次の条件に従って、英語2文で自己紹介文を書きなさい。

【条件】 ①一文目は、自分の名前を紹介する英文を書く。

②二文目は、自分の好きなこと、できることなどについての英文を4語以上で書く。

→ [A] (例) I'm (My name is) ～. I like English very much.

【5】 自分自身について2文で自己紹介を書く問題の正答率は56.4%である。解答類型4が約19%と高いことから、内容的には理解できる2文が書かれているものの、文法的な間違いがあることがうかがえる。書く活動では、表現を練り上げる過程で観点を明確にして生徒同士で読み合ったり、文の完成後には教師が添削をしたりして、英文の正しさに目を向けるような時間を位置付けたい。また、無解答が約4%であることから、書こうとする意欲は向上してきていることがうかがえる。今後も、教科書等で学習した本文や基本文を活用させて、自分のことや身の回りのことについて表現する英文（2～3文程度）を書く学習を、授業や家庭学習の中でさらに継続して行っていきたい。